

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

不惑の球児

筋書きのないドラマをこれからも

松尾 球太

「ゲームセット」球審の声が真夏の球場に響き渡る。最後のバスターは空振り三振。

時をさかのぼること二十三年前の七月。千葉公園球場で行われた全国高等学校野球選手権大会千葉県予選の一回戦。過去にベスト8の経験のある我が母校が、順当に勝利を重ねて千葉マリンスターズの舞台に立つ。そんな筋書きを想い描いていた。

第114号 佑啓 機関紙

とところがある。試合は手に汗握る大熱戦。七対六の一点ビハインドで最終回を迎えた。最後のバスターを迎えた時には声も枯れ、ただただ涙しか出ていなかった。終戦を告げるサイレンが球場に鳴り響き、相手チームに頭を下げたその瞬間、私を見守ってくださっていた野球の神様がどこかにいてしまったようだった。全身から魂が抜け落ちたような感覚は今でも鮮明に覚えている。

生まれは千葉市中央区。とはいっても夏の夜にはカエルの大合唱に、秋には虫の音と都会には程遠い自然豊かな環境のもとで育った。私の名前は「球太」。容易に想像可能でしょうが、大の野球好きの父親に、高校時代ヨット部でインターハイ優勝経験のある母親。そして二人の弟の五人家族。

当然のように、スポーツ大好き



野球に励んだ学生時代

一家。少林寺拳法にサッকার、バスケット等々、様々なスポーツに親しんだ。中でも一番夢中になったのはやはり野球。自宅近くの空き地は、いつしか松尾球場と呼ばれるようになり、日没後まで野球に明け暮れる少年時代。将来はプロ野球選手になると三兄弟それぞれが夢を抱いていた。

最後の夏のまさかの一回戦敗退で目標を失ってしまった自分は、抜け殻状態から抜け出せない日々が続いた。将来の目標もなかったが、自立する勇氣も根性もなかった。とりあえず自宅から通える大学の福祉学部への進学を決めた。進学したのはいいが、充実感も満足感も味わうことがない日々が続き、大学に通うことさえ嫌気がさした時期もあった。自暴自棄になり親との衝突も茶飯事。相当の苦勞と心配をかけてしまった。卒業年度になっても就職活動は全く進

まないまま時は過ぎていく。そんな折、市原市に「ふる里学舎」という施設があることを耳にした。なにげなく調べてみたところ、利用者さんのソフトボールチームがあるなど、スポーツに力を入れていいることを知り、迷いなく受験。ちようど和田浦オープンのため、例年より採用枠が多かったことは本当にラッキーだった。

平成十四年、ふる里学舎市原に入職し、作業担当として陶芸科に配属された。程なく「週末に粘土を買いに行くぞ。」と先輩。「どこに行くのですか。」と聞くと、「益子だよ。」益子と言われても全くぴんと来ず、きよとんとしている私に対して、「益子焼の益子だよ。知らないのか。粘土の仕入れがてら、一流の陶器を見る研修も兼ねてるんだよ。」とややぶつきらぼううな説明。障害者施設だからと言って妥協はしたくない。妥協をしたら一生懸命働いている利用者さんに失礼なんだ。一般のお客様を相手に販売するのだから、良い材料を使つて社会に認められるものを作るんだよ。」と今度は優しい「指導。このときの先輩の言葉が今でも私自身のモノづくりの考えの原点になっている。

必死に粘土と格闘する日々。あつという間に三年の時が過ぎ、充実した日々を送っていた。そんな折、翌年度（平成十七年）の「ふる里学舎しぜん工房」（パン工房）オープンに向けて、誰がパン業務をやるのだろうと同期の間でも話題になっていた。

パン作業に携わりたいと密かに思っていたところ、里見理事長から「パンは好きか」と聞かれた。「大好きです」と即答。すると「福祉施設のパン工房ではなく、一般のパン屋で修行先を探すように。」嬉しいと同時に不安も頭をもたげた。

知識も情報も全く持っていないな

つたため、ひとまずネットで評判のパン屋を検索。手当たり次第に飛び込みで交渉に行く。しかし、当然の話だが世の中はそんなに甘くない。ことごとく断られてしまう。研修先が決まらず当初のやる気は徐々に薄れ、途方に暮れていたところ、理事長の伝手により、市原市にある名店「クロワッサン」で半年間修行できることとなった。

クロワッサンでは早朝五時から夕方まで、ほぼ休みなく立ち仕事が続く。職人さん達の動きには無駄がなく、何十種類ものパンをひたすら焼き続けていた。修行開始当初、俺にはこんな動きは出来ないかもしれないと弱気の虫が顔を覗かせた。そんな時には「思い込んだったら試練の道を行くが男のど根性」と頭の中で口ずさみ、飛雄馬に負けじと歯を食いしばり必死に食らいついて乗り切った。そうしているうちに一流の「パン職人」になりたいという決意が芽生え始めた。この辺りは負けず嫌いの両親のDNAを受け継いだのだろう、両親に感謝。何よりも職人の皆さんが忙しいにも関わらず、手取り足取り丁寧にご指導いただいたお陰もあり、半年後には数種類ではあるが、それなりの出来栄えのパンが焼けるようになっていた。

「パンは生きている。菌との勝負だ！」クロワッサンで学んだことをいよいよ実践する日がやってきた。しぜん工房開所目前の三月中旬、パン窯をはじめとした備品類の試運転である。半年間も修行に行つたのに、何も出来ないではすまされなない。野球人生でも感じたことがないほどのプレッシャー下での作業であつたが、およそ十種類の試作パンが何とか焼きあがった。見栄えは上々、あとは味と食感だ。焼き立てのパンが冷めないうちにと、すぐに事務所に持っていく、理事長はじめ、居合わせ

た職員との試食会。最初の一口を口にした瞬間の皆さんの表情は一生忘れない。「なかなかうまいよ。すごいじゃない。」多くの人に褒め言葉をいただいたお陰で、私が口にしたパンは涙でしょっぱかった。

初めてパンが焼きあがつたあの時から十五年。法人では次々とパン工房がオープンし、今では六事業所でパンを製造するまでになった。現場に入ることは少なくなつたが、地域で有名な行列ができるパン屋を目指して、これからも邁進していきたい。



ふる里
furusato gakusya

さて、冒頭の野球に話を戻そう。高三の夏、野球人生に一先ずの終止符が打たれたが、まさかの展開。事業所が多くなり、野球部出身者と野球好きも増加。ついに平成十八年「ふる里学舎野球部」ができた。

しかし、当時は部員数がまだ少ないことに加えて未経験者もいて、野球部と言うより同好会に近い集団であつた。「勝負事は勝たなければ意味がない。やるからには一番を目指そう。」という理事長の叱咤を激励を受け続けたが、勝利の文字は遠かった。

そんな状況が数年続いたが、四年後の平成二十二年、ようやく関東代表として全国社会福祉施設野球大会へ初出場。北海道帯広にて、全国から集つた野球人が一堂に会し行われる前夜祭。その席上で高らかに全国制覇を宣言。しかし、全国の壁はさすがに厚かった。あつけなく一回戦で敗退。体格もスピードも違う。技術もレベルも全

く違つた。

あれから八年の歳月を要したが、平成三十年度の全国大会で「準優勝」、令和元年度は「三位」とチーム力は上がってきた。これからは職場で野球ができる環境に感謝して、あの時誓つた全国制覇を必ずや成し遂げたい。



来年こそは優勝を！！

野球は筋書きのないドラマといわれるが、人生は野球以上に筋書きがない。この四月、今まで木更津市社会福祉協議会が運営していた木更津市あけぼの園の機能引継ぎを受け開所した「ふる里学舎潮見」と平成二十二年のオープンから五年間在籍していた「ふる里学舎木更津」の施設長を拝命した。野球という目標を失つて自暴自棄になっていた時期もあるこの自分が、である。まさかの展開であつた。

八ヶ月が経過した今でも重圧に押しつぶされそうになる毎日。しかし、不惑の年を迎え、この四十年間を振り返ると様々な経験をさせていただいた結果、もう惑っていない自分が存在していることに気づいた。そして、嬉しいこと、悔しいこと、悲しいこと、苦しいこと、楽しいこと等など、あらゆることを共感しあえる人たちに支えられていることも、今更ながら改めて気づかされた。これからも自分らしく、自分の器の中で精一杯精進していく所存です。どうぞよろしく願ひします。

（ふる里学舎潮見施設長）

親亡きあとは

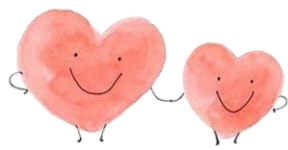
成年後見人へ

泉 幸江

今年のキーワードはコロナで始まりコロナで終わりそうな二〇二〇年です。コロナとともに新しい生活様式を考える年なのかもしれません。コロナのおかげで息子の生活様式を変える年になりました。



十月に入所が決まりました。それを決心した一番の理由は職員さん達と親との信頼関係でした。短期入所を継続しているうちに、ふる里学舎と職員さん達への信頼感が増して、息子の将来を是非託したいと考えるようになっていきました。ひとつ気になっていたのは、本人の気持ちを全く聞かなかった、聞けなかったことです。息子は言葉がありません。本人の気持ちを聞いてあげたかどうか、今でよかったのかという迷いはあります。



二十年前です。千葉県に越してきて、息子が生活介護の事業所に通い始めたころです。保護者会で措置から契約になり、成年後見人が必要になると言われました。その時は全く意味が分かりませんでした。

ある日、千葉県手をつなぐ育成会主催で、講師は知的障害者施設の施設長さんで、成年後見を学ぶという研修に参加しました。その時は、なぜか成年後見制度は息子のために役立つ制度だと思ったのです。その制度を理解するには、自分がやってみるのが一番と考えて社会福祉士の資格を取り、社会福祉士会に入会し、社会福祉士として裁判所へ提出する名簿に登載されました。後見活動から見えてきたことは、親亡き後に必要な制度であるということでした。



私が社会福祉士として受任したある事例をご紹介します。その方はご自分が娘さんの後見人でした。家族構成はご主人が亡くなられ、子供さんは兄妹でした。お兄さんは千葉から遠い地方に結婚して住んでおられました。お母さんは毎月施設を訪問されていていましたが、高齢のためお兄さんと同居することになりました。年に一度訪問できるかどうかという遠方です。お母さんは引き継ぎを裁判所に申し出られ、引き継ぐことになりました。私はお母さんから引き継いだものの、ご本人との信頼関係が全く作れません。自分が親であり、息子を育てた経験があるからと、甘く考えていた自信は木っ端みじんに砕かれました。ご本人は私に対して不信感しかなかったのだと思います。そこで、施設の職員さんの力をお借りしました。ご本人と職員さんと一緒に外出を企画しましたが、ご本人が動かない状況は半年間以上続きました。しかし、一年後には外出を楽しむにされるよう変わりました。この事例から学んだことは、信頼関係

を作るには半端ない時間をかけるしかないことと、職員さんとの連携がないと、後見人は法律行為以外は無効ということでした。

外出にこだわったのはお母さんの希望でもあり、ご本人の生活に楽しみを増やしたいと考えました。本人の財産管理をするというのは、本人に代わってお金の使い方を考えることだと考えています。ある人はあるように、ない人はないように、使い方は様々ですが、本人のために使うという目的は変わらないはずです。

後見人は、親の思いや職員さんのアドバイス、医療関係者等の意見を参考にして、本人に決めてもらいたいと考えます。また、親亡きあとは、親の代わりに、本人のシグナルを受け止めて、サービスを確認する役目も必要だと考えます。



成年後見制度はまだまだ運用面での改善が必要な制度です。認知症の高齢者を支える後見人は多いですが、知的障害者の生活を理解できる後見人は少ないと感じます。とはいえ、親亡きあとは、他に使える制度がないのであれば私は後見制度を使いたいと考えています。課題は二つあります。一つは障害者の人生に最後まで寄り添ってくれる後見人を見つけること。二つ目は報酬の問題です。『後見人は待っていても天から降ってくるわけではない』ある先輩の言葉ですが、今から時間をかけて引き継いでくれる後見人を探したいと考えています。息子は私の人生にいろんな出会いをくれました。お礼の気持ちを込めて息子へプレゼントしたいと思います。息子には生まれてきてよかったといえる人生を送ってほしいのです。(静風荘保護者)

ふる里学舎

バドミントン部

宮内理恵

佑啓会といえば、バレー部や野球部をはじめ、部活動も盛んです。私は運動が得意ではなく、スポーツはもっぱら観る専門。しかし、バレー部や野球部の同僚たちの活躍を見て、少し羨ましいなと思う日々を送っていました。



そんな私ですが、中学・高校の合わせて六年間はバドミントン部に所属していました。今では桃田賢斗選手や女子ダブルスの福ヒロペア等、日本にも有名な選手が沢山いてメジャーなスポーツに感じられますが、私が中学生の頃は、バドミントンと言えばこの選手といったようなメジャーな選手は、あまりいなかったように思います。それなのになぜバドミントン部に所属したかというと、足は遅いし、ボールを使うスポーツは大の苦手。だからと言って運動部でないとすると、楽譜は読めないし、絵もセンスがない。といったところで、テニス部とバドミントン部の二択に絞り、最終的にはテニスは日焼けするから嫌だし、体育館を使用すれば隣でバスケットの素敵な先輩が毎日見られるからといった、なんとも不純な動機で、バドミントン部へ入部しました。遊びでバドミントンの経験はあったので、きつとすぐに上達するだろうと過信していましたが入部してすぐにバドミントン競技の辛さを実感。暑くても体育館は閉めつきりで、サウナ状態。コートも思

ったより広いし、シャトルはラケットに当たらない。こんなはずじゃなかったと入部したことを少し後悔した程でした。しかし大好きな仲間達と共に、大会で良い結果は残せなかったものの、三年間辞めることなく続けられました。

そして高校へ入学。どの部活動に入ろうか、再度悩みました。人間なかなか変わることは出来ません。三年間一生懸命バドミントンをしたからといって、運動神経は良くなりません。

音楽の授業を真面目に受けても、楽譜は一向に読めず。結局、気の合う友人と一緒に高校でもバドミントン部に入部することになりました。高校のバドミントン部は、県大会でも良い成績を残す先輩が多くいる、なかなかの強豪校でした。顧問の先生も、現役時代は全国大会で良い成績を残していた有名選手で、とても厳しい先生でした。テスト前でもお盆や正月でも、ほとんど休みは無く、日が経つにつれ、退部していく友人も多くいました。正直私も退部したいと思うこともありましたが、先生に辞めたいと伝えなければならぬことの方が恐ろしく、毎日体育館でシャトルと向き合う日々を送っていました。そして高校二年の夏。先輩の引退試合の直前に、当時の部長と副部長から、話があると部室に呼び出されたのです。スカートの丈が短いだとか、最近気が緩んでいる、調子に乗るな等と怒られるのかと、今にも泣きだしそうな気持ちを抑えて、部室に入ったことを今でも鮮明に覚えています。部室に入ると満面の笑顔で部長が、「次の部長は、宮ちゃんにお願いするね。」と言。これは人をお断りしている、もしくは悪質なドッキリかと瞬時に思い、「またまたー冗談辞めてください。」と言うと、「バドミントンが上手いとかじゃなくてね。」と部長が口を開きました。それはそれで失礼だと感じながらも、話を聞くと「宮ちゃんには人を繋ぐ力がある。誰よりも仲間を大事にして、部内全体の良い雰囲気を作ってくれから、部長をお願いしたい。」と話をしてくれました。試合で成績も

残せてはならず、団体戦のメンバーに選出されることもあったりなかったり。技量がチームに貢献できないからこそ、毎日辛い練習の中でも、みんなが笑顔でいられるように気を配っていたことは確かで、その姿を見てくれていたのだと思うと、嬉しくて涙が出ました。相変わらず部長になっても、先生には怒られてばかりで、個人では県大会にも出場できなかったけれど、引退まで休むことなく毎日バドミントンを続けられました。



そして今年の七月。職員内にバドミントン経験者がちらほらいることは知っていたのですが、経験者である皆川係長の「本格的に始めましょうか。」という爽やかな笑顔と一言がきっかけとなり、現在は一ヶ月に二回、杜のホールで十九時から二十一時までの二時間、経験者も初心者も一緒になって楽しく活動させて頂いています。ネットも四方面を購入して頂き、設備も完備。職場でも名ばかりですが、部長として仕事も遊びも全力で、楽しい場を皆さんと作り上げていきたいと思っています。興味のある方はぜひ一度、体験しにいらしてください。

(支援員 宮内理恵)

〇●〇●〇●〇●〇●〇●〇●〇●〇●

今年(2020年)はコロナ禍の中で時が過ぎるのが早く感じた一年でしたが、皆さんはどんな年だったでしょうか。二〇二一年は明るい話題が絶えない良い年となること、そして、元気で過ごせるよう祈りながら、佑啓一四号をお届け致します。

(支援員 関岡弘太)

編集後記

今年(2020年)はコロナ禍の中で時が過ぎるのが早く感じた一年でしたが、皆さんはどんな年だったでしょうか。二〇二一年は明るい話題が絶えない良い年となること、そして、元気で過ごせるよう祈りながら、佑啓一四号をお届け致します。

(支援員 関岡弘太)